

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県の家畜セリ市場における肉用牛の価格形成

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 家畜セリ市場, 価格形成要因, 昭和, 上場体重 キーワード (En): 作成者: 安里, 昌信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015370">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015370</a>

# 沖縄県の家畜セリ市場における 肉用牛の価格形成

安里昌信

(沖縄県経済農業協同組合連合会畜産部)

## 1. はじめに

肉用牛の流通は、家畜セリ市場での取引と庭先相対取引の二つの方法があるが、今日、家畜セリ市場は、肉用牛の生体流通の拠点としての役目をはたし、肉用牛の価格形成における役割は、大きいものがある。

肉用牛の価格形成の要因として、(1)遺伝的要因、(2)管理的要因、(3)地域的要因、(4)性的要因、(5)外的要因等が考えられる。

そこで、家畜セリ市場から得られたデータから肉用牛の価格形成に及ぼす要因を分析した。このような分析は、取引ニーズにあった肉用牛の生産を効率よく実施することが出来、今後の肉用牛経営にとって重要なことであると考える。

## 2. 家畜セリ市場の概要

本県は、離島が多いため肉用牛の家畜セリ市場が11カ所あり、そのうち子牛価格安定基金にもとづく指定外家畜セリ市場は、4市場で、残り7市場は、指定外家畜セリ市場である。

肉用牛の生体流通は、昭和45年頃まで、生産農家と家畜商との庭先相対取引が主体であった。昭和47年頃より各地で常設家畜セリ市場が開設されるようになり、その利用率は年々高まっている。昭和57年度でみると、11,902頭が上場された中で88%の10,479頭の肉用牛が取引成立されるまでになっている(表1)。

このように、年々、家畜セリ市場の利用が高まっているとは言え、地理的条件による家畜セリ市場の分散化、1日当たり上場頭数の少なさ、一部地域における家畜セリ市場名簿の不明確、素牛から肥育牛等上物牛の多様性等県内における家畜セリ市場は種々な問題をかかえている。

表1 県内家畜セリ市場上場取引頭数の年次の推移

(単位：頭、%)

年 度	上 場 牛	取引成立牛	比 率
49	4,570	3,306	72.3
50	5,886	4,736	80.5
51	8,006	6,058	75.7
52	7,901	6,267	79.3
53	9,784	8,690	88.8
54	8,824	7,730	87.6
55	9,044	7,684	85.0
56	10,242	8,623	84.2
57	11,902	10,479	88.0

資料：沖縄県肉用牛価格安定基金協会

## 3. 家畜セリ市場の機能的特質

昭和51年度における取引体重は、350~549kgで、全体の66.3%を占めたのに対し、57年度においては、200~349kgで全体の64.7%と取引体重に変化が見られる。これらの結果は、家畜セリ市場の取引形態の変化と同時に機能的変化を示唆している。

このような機能的変化を詳細に調査すべく子牛(299kg以下)、中間肥育牛(300~499kg)および肥育牛(500kg以上)に区分し年次の推移をみた(表2)。

昭和51年度においては、299kg以下の子牛で取引された頭数割合は、総取引頭数の11.7%であり、300~499kgの中間肥育牛の割合は59.4%、500kg以上の肥育牛の割合は、28.9%で、肉用牛の取引形態は、中間肥育牛が中心であることがわかる。

ところが、昭和53年度以降で、肉用牛の取引形態に変化がみられる。昭和53年度でみると、299kg以下の子牛取引頭数は、51年度の11.7%から23.9%へと上向き、逆

表2・子牛、中間肥育牛および肥育牛の取引頭数割合の年次的推移

(単位：%)

	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度
子牛	11.7	15.0	23.9	27.8	35.2	42.7	49.7
中間肥育牛	59.4	48.2	40.0	38.7	38.6	36.4	33.5
肥育牛	28.9	36.8	36.1	33.5	26.2	20.9	16.8

に300～499kgの中間肥育牛の取引頭数は51年度の59.4%から40.0%に減少した。500kg以上の肥育牛取引頭数は36%台でほとんど変化がみられない。51～53年度における取引形態は、中間肥育牛から子牛取引の方向に明らかに移行している。

昭和53年度から57年度への推移をみると、子牛取引頭数は、53年度の23.9%から57年度の49.7%へと上向き、中間肥育牛は40%から33.5%へと安定的に推移し、肥育牛は36.1%から16.8%へと減少傾向が認められた。肥育牛の減少傾向の理由として枝肉出荷の増加に起因するものと思われる。また、昭和51年度から57年度までの家畜セリ市場における取引形態は、明らかに中間肥育牛から子牛取引へと変化が認められた。このような家畜セリ市場の取引形態の変化は、子牛価格、中間肥育牛価格および肥育価格等の生体単位の変化に起因するものと思われる。

#### 4. 肉用牛の生体取引価格の推移

子牛、中間肥育牛および肥育牛の価格単価の年次別推移を示した(表3)。

まず、子牛と中間肥育牛のそれぞれ1kg当たり価格について昭和50年度から51年度において比較検討すると、昭和50年度の中間肥育牛価格は子牛価格よりも32.3%も高いのに対し、51年度は1.2%高へと推移している。この期間は、子牛価格よりも中間肥育牛価格が常に高い価格形成になっている。ところが、昭和52年度以降における中間肥育牛価格は子牛価格よりも低価格形成に転化し

ている。すなわち、昭和50年度から51年度にかけては、子牛の状態では販売するよりも中間肥育牛で販売した方が有利となっている。しかし、昭和52年度以降の子牛価格と中間肥育牛価格は逆転する。昭和52年度における生体1kg当たりの平均価格をみると、中間肥育牛が704円に対し、子牛価格は731円と27円高となり、昭和56年度になると、その差は138円にまで拡大している。すなわち、中間肥育牛で販売するよりも子牛段階で販売した方が有利となる現象が認められた。このような現象によって、299kg以下の子牛の取引頭数の割合が増加したものと思われる。

次に、子牛価格と肥育牛価格について比較検討した。昭和50年度から52年度における1kg当たり価格をそれぞれ比較すると、昭和50年度は、肥育牛価格が子牛価格よりも69.9%高で、昭和52年度は、4.4%高へと推移している。この期間は、肥育牛価格が子牛価格よりも常に高い価格形成を示している。ところが、昭和53年度以降、子牛価格と肥育牛価格は逆転している。昭和53年度における生体1kg当たり平均価格をみると、肥育牛の828円に対し、子牛は866円と38円高であったが、昭和55年度になるとその差は150円に拡大した。

子牛価格および肥育牛価格の年次別推移から推察したことを列記すると下記の通りである。

(1) 子牛価格と肥育牛価格の差をそれぞれの年度で比較すると、3カ年間は価格差が大きく、その後1カ年間は価格差が小さくなる傾向が見られる。それらの傾向から子牛と肥育牛の価格差は3カ年ごとに価格サイクルの存在することが示唆された。

表3. 県内家畜セリ市場における体重別取引価格の年次的推移

(単位：円/kg)

区 分		50年度	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	備 考
1 kg 当り 平均価格	子牛 価 格 A	471	690	731	866	1,104	1,093	895	679	299kg 以下
	中間肥育牛価格 B	623	698	704	768	966	955	818	712	300～499kg
	肥育牛 価 格 C	800	810	763	828	974	943	870	851	500kg 以上
比 率	B/A	132.3	101.2	96.3	88.7	87.5	87.4	91.4	104.9	
	C/A	169.9	117.4	104.4	95.6	88.2	86.3	97.2	125.3	

(2) 肥育牛価格がゆるやかに増加しているのに対し、子牛価格の変動が激しい。このように子牛価格の変動が激しいことは、繁殖経営に不安定をもたらすと同時に、肥育牛経営にも悪影響を及ぼすことが示唆される。

(3) 子牛価格と肥育牛価格が変化することによって、家畜セリ市場における肉用牛の販売形態にも変化を及ぼすことが明らかになった。

また、行政による価格安定事業に農家が鋭敏に反応した結果として、販売形態の変化があると思われるので、今後、詳細に論究する必要がある。

(4) 肉用牛の価格単価に及ぼす上場体重の影響を図1に示した。

肉用牛の価格単価は、いずれの年次においても、199～350kg前後および600kg前後で平均値価格よりも高く、350～550kgでは明らかに平均値価格よりも安いことがわかる。

上記の現象から示唆されることは、各地域において子牛生産あるいは肥育牛生産かの構造的な分業化を一層進展させるか、子牛の付加価値を高めるため域内一貫経営生産方式の確立が必要である。

また、中間肥育牛の価格単価が相対的に低いにもかかわらず、宮古、八重山および多良間においては、中間肥育牛の販売形態が主体となっている。

そのことは、生体重を増加せしめることによって粗収益の増加、すなわち、相対的な価格の増加を図ることを意図したものと思われる。しかしながら、相対的な価格の増加は、必ずしも差引収益と一致するものでなく、見せかけの収益増加に外ならないので注意する必要がある。

以上のことから、中間肥育牛が取引主体となっている地域については今後、最適出荷時期を検討する必要がある。

肉用牛の価格単価に及ぼす性の影響を図2に示した。

去勢牛は、子牛および肥育牛が平均値価格よりも高く、中間肥育牛で安く取引されている。

一方、雌牛は子牛のみが平均値価格よりも高く、中間肥育牛および肥育牛は平均値価格よりも安く取引されている。しかしながら、肥育牛段階で高くなる傾向にある。

去勢牛と雌牛の価格差は199～325kgまでほとんど同じであるが、325kg以上になると去勢牛が雌牛の価格よりも明らかに高い結果となっている。

一般的に雌牛の肥育を考える場合、次の2点が考えられる。

1. 雌子牛の肥育を積極的に取り入れ、肥育技術の確立を目指す必要がある。雌子牛の肥育については“肉用牛資源の食いつぶし”だとする観点から賛否両論がある。しかし、肉用牛の改良の面から考えれば、体型上繁殖に

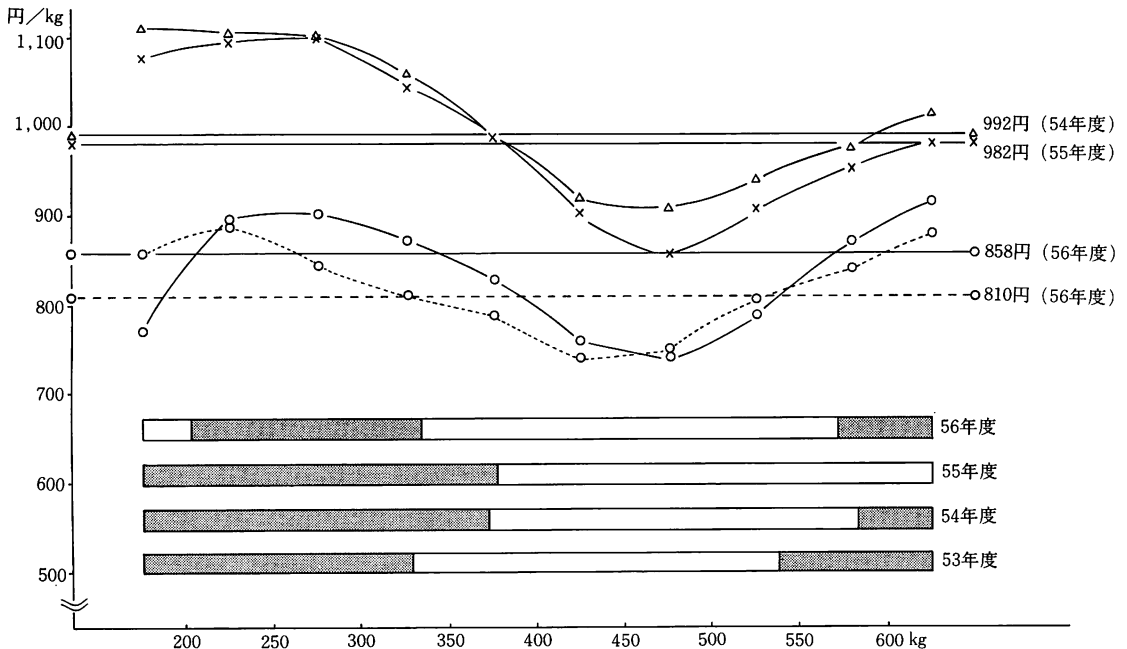


図1. 同一体重における価格の開差

寄与出来ないと思われる雌子牛については選抜し、肥育を考慮すべきである。

販売するのではなく、ある一定期間飼ひ直しをし、付加価値を高めてから販売する必要がある。そのため、老癩牛における肥育技術体系の確立が望まれる。

2. 繁殖に寄与出来ない老癩牛については、そのまま

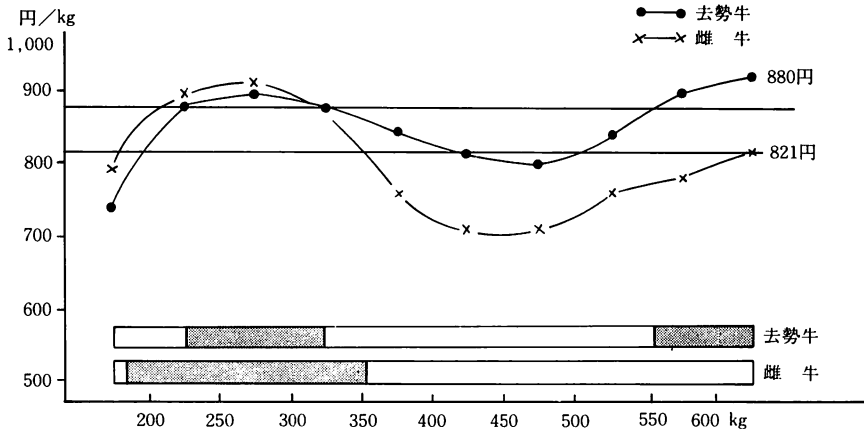


図2. 肉用牛の価格単価に及ぼす上場体重の影響 (昭和56年度)

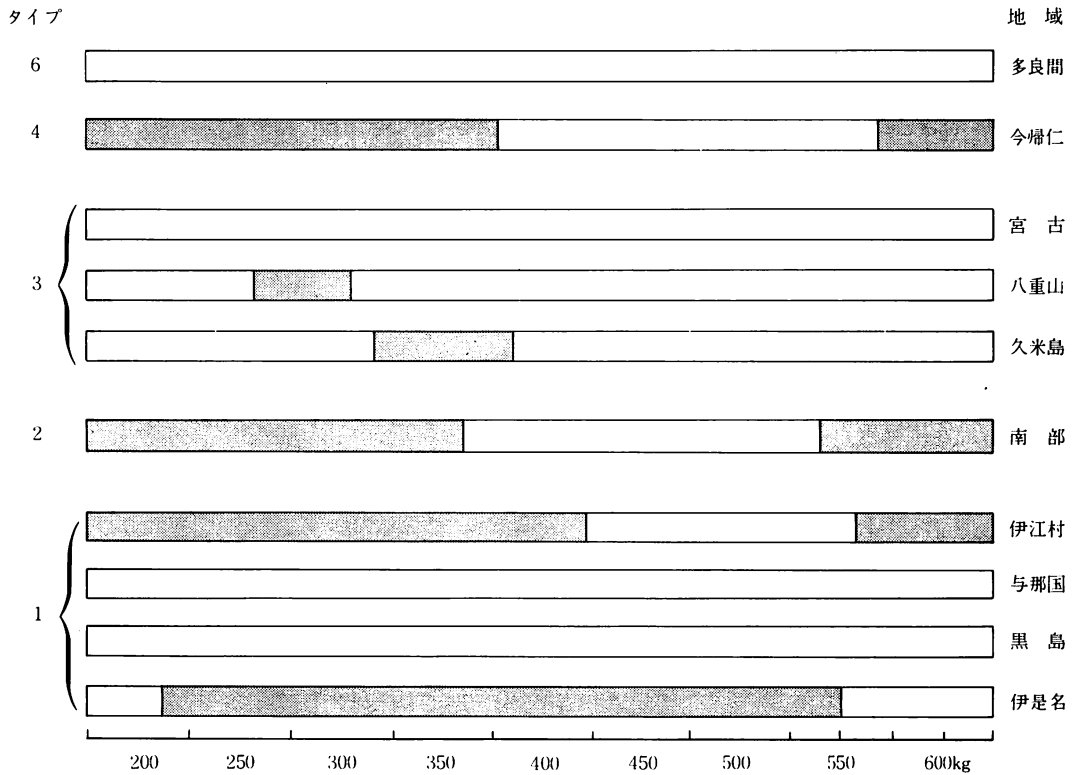


図3. 去勢牛の価格単価に及ぼす上場体重の影響 (様式図)

注) 1. 黒: 県平均価格以上  
2. 白: 県平均価格以下

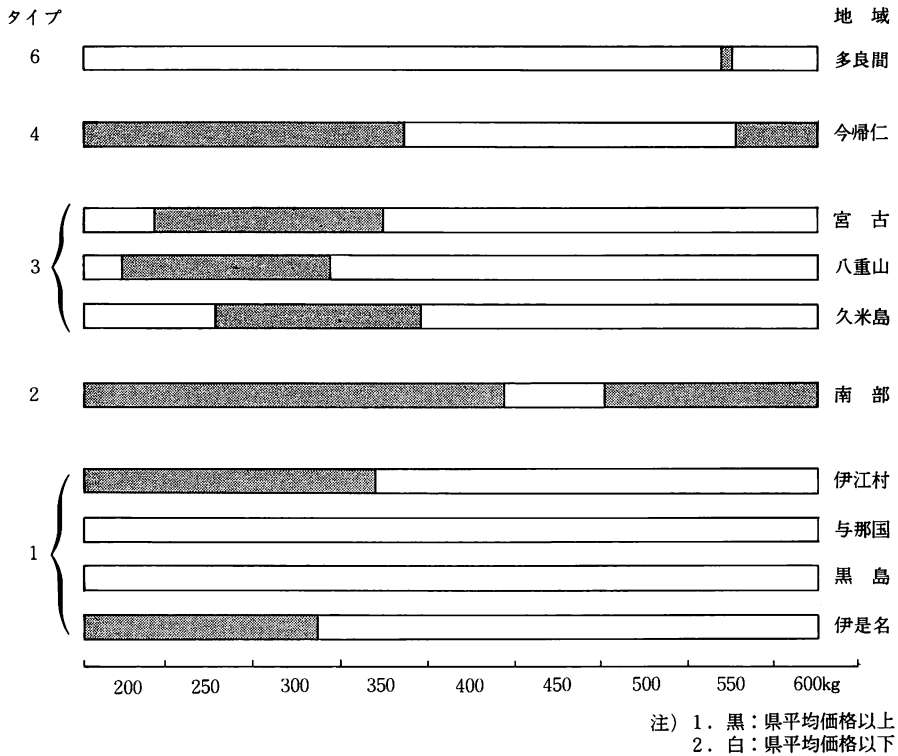


図4. 雌牛の価格単価に及ぼす上場体重の影響（様式図）

昭和56年度県内各家畜セリ市場における肉用牛の価格単価に及ぼす上場体重の影響を県平均値と比較検討した。

去勢牛についてみると、子牛価格は本島および本島周辺の離島である南部、伊江、今帰仁および伊是名の各家畜セリ市場で県平均値価格（880円）よりも高く、中間肥育牛では、伊是名および久米島、肥育牛は、沖縄本島の南部、今帰仁および伊江でそれぞれ県平均値価格よりも高い結果となっている（図3）。

一方、雌牛（県平均値価格821円）で比較検討すると、子牛価格は南部、伊江、今帰仁、宮古、八重山、久米島および伊是名が高く、与那国および黒島で安く取引されている。中間肥育牛は、南部を除いてほとんど安く取引されている。特に肥育牛は、肥育牛取引主体である南部および今帰仁で高く取引されていることから、他の地域においても考廃牛の付加価値を高めてから販売する必要がある（図4）。

### 5. 肉用子牛の価格に及ぼす個体ごと体重の影響

肉用牛の個体ごと体重と価格との関連を知るため、昭

和55年度宮古郡農協家畜セリ市場で上場された11カ月齢の去勢牛（393頭）および雌子牛（197頭）について調査した。

個体ごと体重と価格との関連を知るため、分布状態を4群に区分した。すなわち、(Ⅰ)体重・価格ともに平均値以上の群、(Ⅱ)体重は平均値以上だが、価格が平均値以下の群、(Ⅲ)逆に、体重は平均値以下だが、価格が平均値以上の群および(Ⅳ)両方とも平均値以下の群に区分した。

去勢子牛の場合、Ⅰ群は、全体の44.3%、Ⅱ群は6.1%、Ⅲ群は6.6%、そしてⅣ群は40.2%で、体重が重くなればなる程価格が明らかに高くなり、発育の良好な去勢子牛程価格も高いことを示している。

一方、雌子牛の場合、Ⅰ群は全体の35.0%、Ⅱ群は10.7%、Ⅲ群は11.2%、そしてⅣ群は35.0%の分布状態となり、去勢子牛の分布状態と多少異なっていた。

次に、同一体重における肉用牛の価格開差を調査した。調査牛は、昭和55年宮古群農協家畜セリ市場に上場された7～15カ月齢の範囲で、去勢牛の体重が250～420kgまで10kg単位で、同一体重のものが4頭以上ある事例を抽出した。

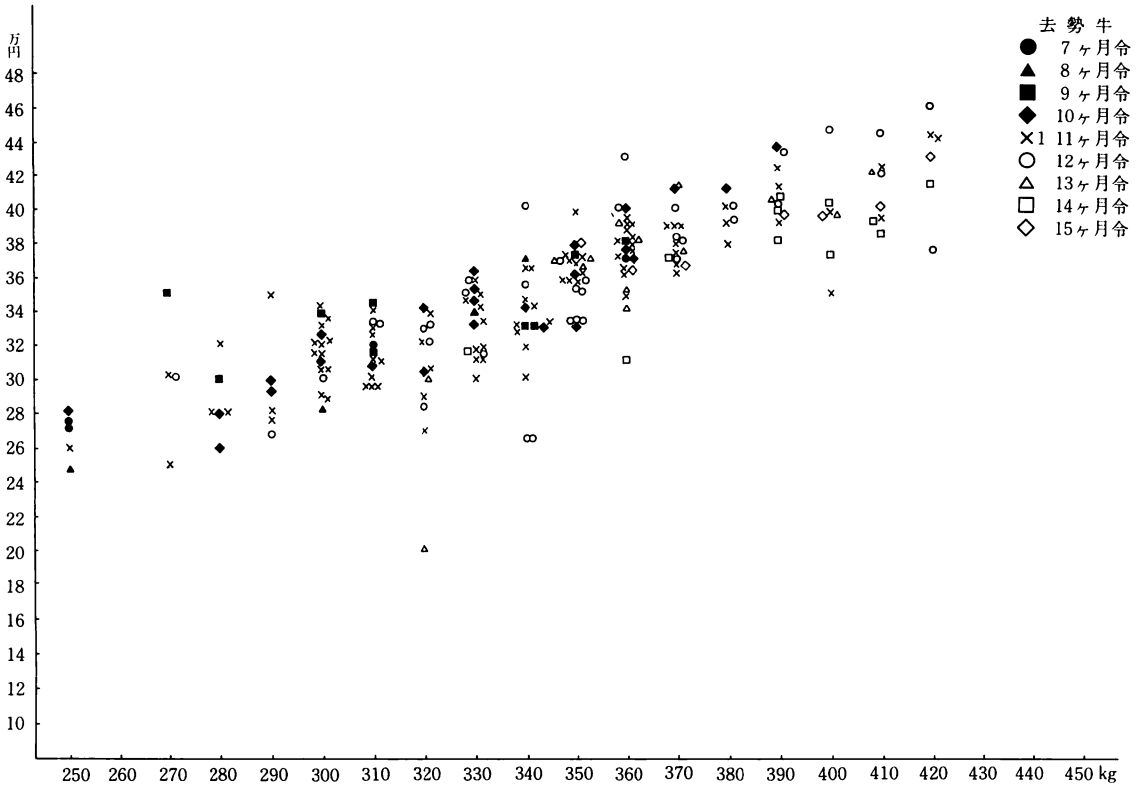


図5. 同一体重における価格の開差

同一体重の価格開差を図5に示した。この図でわかるように、体重が重くなるにつれて価格が平均的に高く(全体的に右上がり)になる傾向にある。しかし、肉用牛個体間での価格のバラツキが大きいので、体重の重い肉用牛の価格が軽い肉用牛の価格よりも安い事例が数多くみられる。

同一体重内で比較すると、月齢の若い肉用牛の価格は、月齢の進んだ肉用牛の価格よりも高い傾向にある。このような傾向は、何処の家畜セリ市場でもみられる一般的

な現象であることが知られている。

すなわち、肉用牛の発育の速い個体程、肥育能力が高いとの判断から高価に取引されるのである。しかし、月齢、体重の等しい個体間でもかなりの価格差がみられるのは、肉用牛の発育条件のほかに、体型、資質および血統条件など、全体的な作用が働いて肉用牛の価格が形成されるものと思われる。このように、肉用牛の価格形式要因は、多元的かつ個性的であるので、これら総合的な観点からの調査分析が今後望まれるであろう。